

## - 8 世紀の日本

6～7 世紀に日本へ大陸文化が伝わる前から、日本と大陸の間では盛んに貿易が行われていた。6 世紀の終わりまでに、朝鮮半島と中国から伝わった技術や文化が日本の生活にどんどん広がった。仏教と漢字は支配階級間ですぐに採用され、日本の文化的な光景は劇的に変化した。

推古天皇の甥である（554 年-628 年）聖徳太子（574 年-622 年）などの強力な人物が推進することで、仏教の影響は日本中に及んだ。聖徳太子は 593 年に大阪に日本初の朝廷が出資した仏教寺院である四天王寺を建立するために活躍した。博物館から 2 キロ北の叡福寺にある、聖徳太子墓横穴式石室の実物大の再現とともに、四天王寺の復元模型が博物館に展示されている。

仏教の経典や法令、重要な書物などを広めるために、漢字は 8 世紀までに日本で広範に使われるようになった。同じ時期に紙も日本に持ち込まれたが、6～7 世紀に文字が書かれた紙はほとんど残っていない。紙はもろく非常に高価だった。この時代に漢字が書かれた例として残っているもののほとんどが木簡に書かれたものだ。木簡は紙よりもずっと安価で、大半が交易や借金の記録だ。現存する木簡から 7～8 世紀の西日本の役人たちによる日常生活の一面を知ることができる。